私の日本地図

金泰生

未来社刊

私の日本地図

金泰生

未来社刊

金　泰　生

1925年　朝鮮・済州島に生まれる

1930年　渡日

著　書　小説集『骨片』(創樹社，1977年)

私の日本地図

一九七八年六月一〇日　第一刷発行

定価　一二〇〇円

©著者　金泰生（キム テ セン）

発行者　西谷能雄

発行所　株式会社　未来社

東京都文京区小石川三の七

振替(東京)七―八七三八五番

電話〇三(八一四)五五二一番

本文印刷＝ひろせ印刷

装本印刷＝形成社

製　本＝今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。

目次

序章　故郷へ――……五
第一章　小さな旅立ち……一九
第二章　出会いと別れの間で……五七
第三章　失われたるもの……一一三
第四章　母国甦える日々……一七三
あとがきに代えて……二五三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

私の日本地図

序章　故郷へ――

朝鮮の地図をひらくと、本土のほぼ西南端に位置する木浦からさらに南方の海上に、小さな馬鈴薯を思わせる楕円形の島がぽつりと東西によこたわっているのを見ることができる。それが、私の故郷・済州島である。済州島の面積はおよそ一八六〇平方km、木浦を南方に去ること一四〇余km、東北方の釜山とは二七〇余kmを相距て、日本の大分県、高知県の南端とほぼ同じ緯度におかれている。東西八四余km、南北四〇余km、二五二kmの海岸線をめぐらし、大阪府や島根県、香川県などとほぼ同じ面積をもつ朝鮮で最も大きい島である。

よく晴れた日には、対馬の西北端から望むと玄海灘を距てて遙かに朝鮮半島の陸影をはっきりと認めることができる、という。一衣帯水ということばはたとえ月並であっても、朝鮮と日本の相対的な距離関係をしめすときに用いられる場合、このことばのもつ市民権を人は決して否めないだろう。

ただ、その対馬はもとより、釜山からさえ二七〇kmを去る遙かな洋上に距てられたわが故郷・済州島は、決して私の肉眼の前に姿を現わすことはない。それは、これまでのほぼ半世紀もの歳月にわたってそうであったように、依然として今も、私の肉眼の視野をはみ出た故国の海の水平線の彼方に全容を没したままのものである。

いつ頃からか日本では、朝鮮を指して「近くて、遠い国」といいならわしてきている。この矛盾にみちた表現の遠近法は、「近くて、近い」韓・日間の政治的癒着状況を背景にもっていこ

とによって、よりいっそう私を含めた在日朝鮮人のもろもろの心を撃ち、「近くて、近い」韓・日間の政治的カッコの中にくくられた故郷――うしなわれた故郷を渇望する者の心情によりそう人間的な意味をおびてくるようだ。

私にとって、故郷とはいったい何であろう？　私は自分が外部の世界に眼を開きはじめた少年期の終りから今日に至るまで、そのような問いを自身に向けていくたび発しつづけてきたか数しれない。そして今、私は改めて同質の問いを自らにつきつけてみるとき、たやすいはずであると考えていたその応えを、ここへ明快に差出すことになぜか困難を覚える。

石川啄木はかつて、石もて追わるる如くに故郷を棄てねばならなかった苦渋を歌い、室生犀星もまた、故郷を遠きにありて想うものと抒情した。しかし、私は己が故郷を想い描くことはあっても、歌うことが到底できない。私の故郷は、私自身の感性と情念が長い歳月に亘ってほしいままに培ってきた、きわめて作為的な故郷にすぎないかもしれないのだ。故郷を離れてすでに半世紀に近い間、私はついに一度も父母の地を踏みしめる機会をもつことがかなわなかった。私が己が故郷に触れて何かを語ろうとすれば、必然それは知らぬこと余りに多い故郷についてだけである。私には故郷を歌うべき資格など到底ないのだ。

かつて私にも、二度ほど郷里に帰れる機会らしきものが訪れたことはあった。最初はあの太平洋戦争の末期に近い頃、静岡県の伊東で徴兵検査なるものを受けさせられた時であった。長く暗い戦争の時代を生きる一人の若者としての私の心の中には、当然のこととして〝死〟の黒い影が日常的に居坐っていた。一口に、長く暗い戦争の時代、といえば簡単に聞こえもするが、それは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

私にとって一種の皮膚感覚のような切実な想いのこもった言葉なのだ。私が日本の土を踏んだ一九三〇年の翌年から、日本軍はすでに中国において中国侵略の具体的な行動をおこしていた。それが〝満州事変〟であり〝上海事変〟であった。数年後に二・二六事件があり、翌一九三七年には日・中事変がぼっ発している。外界に対して無防備な幼児のように、少年期の私は口をあんぐりと開いてきな臭い時代の硝煙を呼吸しながら育つほかなかった、ともいえる。それらのことについては後にくわしく触れねばならないだろう。ただ少年期の私はたとえ戦争の〝小さな傍観者〟でありえたとしても、青年期に達した私はもはや単なる傍観者でありうるはずがなく、〝戦争〟の方から私を狩りこみにおしかけてきたのだ。私は一種の末期感にさいなまれながら、鳥類の帰巣本能にも似て、せめて故郷を一度だけでも訪ねてから、狩りこみを受けいれようとしたまでだ。私は徴兵検査を故郷で受けるのだという口実を設けて、駈けずりまわってみたが、結局その努力は徒労に終わってしまった。

いま一つの機会は、一九四五年の解放直後の一〇月にもっと具体的な形で訪れてきた。母方の叔父が出泉丸（いずみ）という二〇トン余りのちっぽけな焼玉エンジンの機帆船を仕立てて、玄海灘をわたって行くことになった。この時ばかりは解放された母国の風光にまみえ、その大地を自分の足で踏みしめてみたいという私の決意も真剣だった。

だが、真剣だったのは何も私一人だけではなかったようだ。乗船客、つまり解放と同時に飯場をたたみ、家財を整理して故国に引きあげるべく江の島の海の見える旅館に集結した三〇余名の同胞もまた、想いは私と変わらなかったということである。話のこじれはそのことに起因してい

た。いざ出帆の時刻の間際になってはじめて船には備えつけのコンパスもなければ、もちろん朝鮮近海の海図もないことに気づいたわけである。にわか船主である叔父はそれらのものを入手させるべく私を三浦三崎港にはしらせた。そして船は、帰心矢の如し、の言葉そのままの心境にあった同胞たちの催促にさからえず、ひとまず伊豆の伊東港に向けて月明の相模灘を出帆していった。

叔父は明らかに誤算していた。陸に上った河童ということばがある。同様の意味で陸に上った船頭ということばもある。この両者に共通しているのは、余り役に立たない存在ということであろう。そして逆に、私の叔父は、たとえていえば泳ぎもできないくせに水にとびこんだ山猿のようなものである。それも海に、しかも台風期の荒海に、である。私の叔父は、ただ海でとれた魚を食べることが好きというだけで、それ以外に海とは、まして船とは、全く無縁な人物であった。

一方、私は同行した出泉丸の旧船主の勧めに従って、まず浦賀港へ行くことにした。三崎にはロクなコンパスがないというのが彼の意見であった。彼の案内で私は無事にコンパスだけは手に入れたが、不幸なことには、浦賀港の店には逆にロクな海図がなかった。私たちはそれを求めて、再び三崎港に向うことにした。敗戦直後の交通事情をわきまえている人であれば直ちに想像のつくことであるが、私たちが横須賀線の衣笠駅（当時の終着駅）についたのは終電車で、すでに夜半近く、バスなどあろうはずがなかった。私たちは重くしびれるような足をひきずり、歩きづらい田舎道を辿って三崎まで月明りを頼りに歩いた。

翌日、つてを求めて三崎の町を駈けずりまわってみたが、朝鮮近海の海図を所持している者は

容易には見当たらない。それでも私は諦めるわけにはいかなかった。私はついに海図の所持者を見つけ出し、海図ばかりでなく、遠洋漁船のベテラン機関長でもあった坂本某と名のる男を口説き落して、共に伊東へ向った。しかし、伊東には船は居なかった。若干の飲料水と食糧を補給して、伊豆の下田港へ発った後だった。その時までも、私は自分の犯した誤算に気づいていなかった。なあに、あわてることはない、下田に行けばきっと船と叔父に会えるだろう。今夜はともかく伊東に一泊しよう。下田に行くのは明日の早朝でもよいだろう……。私と坂本は単純にそう考えた。何といったっておめえ、海図とコンパスがなくちゃあ動きがとれめえ、きっと下田で待ってるさ。坂本は、戦時下にアメリカ海軍機の機銃掃射や爆撃をあびながらサイパン、パラオで漁撈に従事してきたベテラン機関長らしい自信をもって、私にいった。私はたのもしい想いで彼の顔を見つめ、彼の言に従った。

翌日、私たちはバスにゆられて下田へ向った。おんぼろバスは速度がきわめておそく、しかも河津町から道を湯が野方面にとり、湯が野から天城の東をかすめて峠を越え、箕作に抜けるあの『伊豆の踊子』のコースの山道を悲鳴を思わせるエンジンの音を絞り出しながらのろのろと登って行った。私は再びいらだちはじめ、眉間に青筋がふくれだすのを覚えた。坂本は満足気に鼻歌などを歌っているというのに。船を下りた船頭は陸の旅を珍らしがるようだ。

四時間をついやして、その日の午後に私たちが下田に着いてみると、そこにも叔父の姿は見あたらない。もちろん、あの出泉丸も。

坂本は首をかしげ、蒼ざめてうろたえている私を見つめた。そして港に停泊中の漁船にすたす

たと入りこんでいって、情報収集にとりかかった。私はこの時、船乗りには船乗り同士の仁義というものがあるのだということを初めて学んだような気がする。坂本は何隻かの漁船に気軽く出入りして、一時間後には海図とコンパス以外の情報はすべて仕入れおえたのだ。米、みそ、醤油、機関用の重油、水、たばこ……。それらを補給して、船はその日の正午すぎに出港していた。当然といえばそれは極めて妥当な叔父の判断といえた。私一人のために、三〇名を越える乗客——中には幼児や身重の婦人も居た——を一個所に漫然ととどめておくわけにはいかなかったはずである。私を待つことは時間だけでなくすべての物資の浪費につながるはずだから。まして叔父にとっては、私の同行者の坂本の存在などは想像外のことなのだった。

ただ幸いにも、船の次の予定寄港地が紀州の勝浦港であることだけは、坂本の仕入れた情報によってはっきりしていた。私たちはその夜、下田の安宿に泊った。私には、どうせここまで船を追ってきたのだ、つくすべき誠意は行為によってしめしたのだから、叔父も立腹はすまいだろうという安易な自慰の気持がなかったとはいえない。だが、坂本の顔には明らかに後悔の色がみてとれた。敗戦で文字通り陸に上った船頭の坂本は目ぼしい仕事もなく売り食いしながらぶらぶらしていたのだった。坂本が私の誘いに乗ったのもそうした生活の不安があったからだろう。彼の名誉のためにこのことは是非いっておかねばならないが、坂本は朝鮮人であった。彼の本名はついに聞き洩したのだが、坂本が私の口説きにのったのはただ金が目当てだけではない節があった。彼にもたしかに私同様じぶんの故国をこの機会に一度見ておきたいという気持があったと思う。ついでに金になれば、一石二鳥というわけだ。その意味では、坂本は太っ肚な船乗りである以前

にちゃんとしたチョソンノム（朝鮮野郎）ということになる。しかも、日本人である彼の妻君までが、あんたも男だろう、自分の腕を見込んでこんなに頼まれたら船乗りみょうりだよ、一緒に行ってやんなよ、と傍から口添えまでしてくれたのだから、彼女もなかなかの女性だったわけだ。

私は、坂本を慰労する気持もあって宿屋の女中さんに頼みこみ、その夜は二人してカストリ焼酎をしこたま飲んだ。明日はゆっくり起きて、のんびりと出かけることにしようや、などと他愛のないことをまくしたてながら床に就いたのだった。

しかし、私たちはゆっくり睡眠をとるどころか、暁方の五時にはもうこっそり宿屋を抜け出さねばならない破目になった。なぜなら、私は夜中に不覚にもふとんの中で失禁してしまったのだ。一〇月といえば暁方はすでに冷気を感じる季節である。カストリの酔いもあったし、前後数日間に積った疲労もたしかに手伝っていたと思える。私の寝間着は背面までぐっしょりと濡れ、私は冷気に震えながら眼を覚まして自分の不覚に気づき、顔が火照った。私は眠りこけている坂本をゆり起こして、事態を告げ、嫌がる彼を追いたててこっそりと宿屋を脱出したのだった。三〇余年を経た現在も、下田といえばあの夜の失態を私は思い出す。顔が赤らむ。そして後に私は、俳人・石田波郷に「胸の手や暁方は夏過ぎにけり」という句のあるのを知った時も、またしても下田のあの夜を想い出したのだ。一〇月の暁方はすでに寒いのである。殊にあのような場合の寒さは身に泌みるものだ。しかし、そんな早朝にバスの便などあろうはずがない。

私たちは知恵を絞って運送会社を見つけ出し、強引に伊東行の貨物トッラクに便乗して再び天城路を越えた。私たちは陸路を大阪に出て、紀伊半島を迂回し、紀州勝浦の湾に望んだだっ広

い旅館で暴風にのたうつ海を見つめながら不安な三日間を過した。坂本はしきりに首を横にふって太い溜息を洩らした。海の男である彼は本当の海の怖さを知っていたのだ。三崎港の沖合で小さな鰹船をあやつっていたに過ぎず、まるで航海には経験のないあの船長。焼玉エンジンにかけては石巻港No.1と自称はしていても、機関士の免状すらもたないあの若い機関長。行きあたりばったりにかきあつめた数人の船員と私の叔父、そして彼らに航海の間の生を託した三〇余名の同胞たち……。それに加えてコンパスも海図もない航海なのだ。ズブの素人である私にも彼らと船の末路は眼に見えるようであった。

このようにして私は片瀬・江の島を出てから一週間余を費やして下関港まで叔父の船を追い続けた。だが、ついに明確な消息をつかめないままに、私は疲労困ぱいして帰郷を断念するほかなかった。下関を引きあげる前夜、所持金を使い果たした私は投宿した商人宿の薄暗い裸電灯の下で、しわだらけになった朝鮮近海の海図を拡げていつまでも瞳をこらしていたものだった。

下関港から釜山に至る直線コースは二〇〇㎞未満、かつての釜・関連絡船であれば時速一〇ノットとして一〇時間前後の航程にすぎない。それにひきかえわが故郷・済州島は釜山からさえなお西南方に二七〇㎞の航程をもつ環海の孤島である。私は、この時ほど故郷というものの遠さをしみじみと想ったことはない。それは空間的な距りの遠さをいうのではない。あくまでも私を拒みつづける故郷と私との心の距りの遥かさなのだ。

しかし、それでいて私はなお、しわだらけになった海図の上に描き出された馬鈴薯を思わせる済州島の図形に瞳をこらして、そこに象嵌された故郷のもろもろの風物を掘りおこすことをやめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co